

表1. 状況に応じて用いられる話し方

「出生前診断について話を聞きたいのですね」
「お腹の赤ちゃんの事で、どのようなことが心配なのでしょうか」
「出生前診断は全員が受けなくてはいけない検査ではありませんが、〇〇さんにとって必要かどうか、一緒に考えてみましょう」
「〇〇さんのご年齢からは、Down症候群のリスクは1/XXXとなります。この確率を聞いて、どのように感じられましたか」
「〇〇さん自身は、（出生前）検査について、どのように考えていますか？」
「検査を受けるかどうか、迷っているようでしたら、何でも相談してください。」
「私の専門ではないので、できる範囲内での話になりますが、必要なら専門家を紹介することもできますよ」
「ご主人（パートナーの方）はどう思って（考えて）いらっしゃいますか？」

※ これらは文脈に応じて使用する。

表2. Do NOT 例

「出生前診断を受けたいのですか？」
「あなたにとっては必要ない検査だと思いますが」
「あなたの年齢なら受けた方がよいと思いますよ」
「結果によっては中絶につながる検査ですが、受けたいのですか？」
「検査を受けるかどうかは、あなた次第です」
「私は出生前診断については否定的な立場ですから」
「あなたが検査を受けたいっておっしゃったんですよ」
「病気のお子さんを持つというのは大変なことですよ」
「出生前診断はよくわからないので、他で聞いてください」

テーマ： 漠然とした不安

名前を含め、面接に必要な情報は、シナリオごとに設定する

場面設定： 妊娠9週 再診 診察後

患者： ○○ ○○ 34歳 女性（分娩予定日の時点でも34歳）G1P0

医師シナリオ：

妊娠9週の妊婦さんが再診で来院されました。分娩予定日の修正は不要で、妊娠経過は良好です。その妊婦さんから、出生前診断について相談があるとされました。

妊婦シナリオ：

完成版では、ページを分けるなど、学習に適したレイアウトを考慮する

清恵さんは、32歳の夫と暮らしています。これまで仕事が忙しく、結婚4年目にして子どもを考えるようになり、いわゆる「妊活」をして子どもを授かりました。胎児心拍が見えた日と夫に伝えた次の日、夫の母から電話があり、「清恵さんは、高齢妊娠なんだから出生前診断を受けた方がいいんじゃないの。ああ、お金のこととかは心配しなくていいから…」といろいろ言われました。あまり出生前診断には乗り気ではないのですが、妊娠9週の妊婦健診で産婦人科医に相談することにしました。

セッションの始まりの言葉： 妊婦から

「出生前診断って、私も受けた方がいいんですか…」

事例における目標を明示した

目標：

- ✓ 妊婦および家族に対して支援的なコミュニケーションが行える【共】
- ✓ 妊婦および家族の持つ不安を傾聴し、問題を共有できる【共】
- ✓ 妊婦および家族の情報を確認し、遺伝学的リスクの算定ができる【共】
- ✓ 妊婦とその家族の持つ心理社会的問題を支援できる【共】

注意点：

- 本人の自律的決定ではなく検査を受けようとしているケースです。家族関係に踏み込む可能性を孕んでおり、注意深い対応が必要です。
- 心理社会的側面に加えて、本人の高年妊娠、出生前診断に対する理解の確認も必要です。
- 出生前診断に関する意思決定はカップル、特に女性が尊重される必要があります。

演技の指針、振り返りの参考になるように、注意点も記載した